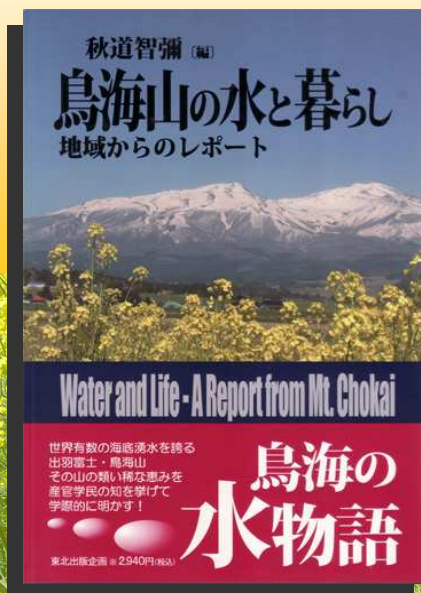


鳥海山の水と暮らし

地域からのレポート

(秋道 智彌編 ・ 東北出版企画)



ここにあります！→YA/452.9/AK
右の背ラベルを参考にして下さい。

YA
452.9
AK

本書は、総合地球環境学研究所のプロジェクト（人間文化研究機構・連携研究「人と水」）の成果として、今春、東北出版企画から刊行された。

取り上げられたテーマは、鳥海山と水を中心に、湧水、生物、植物、森とそれに関わる人々の生活、農業、文化、エネルギー、行政の取り組みなど多岐にわたっている。また、専門的研究者から地域の研究者、行政・企業・農業者の方まで、執筆陣の層も厚く、総勢17名の手によるものだ。いずれも「そこに生きる人びとの暮らし」を視座にすえた論述であり、鳥海をめぐるさまざまな「知と経験」を本書で縦横無尽に展開している。

また、本書では湧水についての研究が豊富に紹介されている。なかでも谷口真一氏の最新の研究によって、遊佐の釜磯海岸、女鹿湾から湧出する海底地下水湧出量が、現在、世界一を誇っていることが明らかにされているなど、世界的視点からも鳥海山の湧水生態系の貴重さと保全の大切さを考えさせられる。

ぜひとも、日々鳥海山を仰ぎ見て生きるお一人ひとりに、地元の宝物を再認識していただきたい一冊だ。

さて、本書の中で、私は「森と人の新たなつながりー多様な主体の共創による庄内海岸の森づくり」と題して、クロマツ林として知られる庄内地方の海岸林保全の最近 10 数年の取り組みについてまとめさせていただいた。

庄内の海岸林保全は「公益の森づくり」として知られ、1998 年の大雪によるクロマツへの被害（松くい虫被害、森林の維持管理不足などが本来の原因）がきっかけとなった。その後、行政・NPO・住民団体・森林組合・教育機関・所有者などが協力して保全する枠組みづくりをめざし、関係者が車座的につながりあう「共創のネットワーク」が公的に形成され、成功を収めている事例として全国、海外から注目されている。

自然環境の危機という「マイナス」の経験を、人びとが自然の大切さを再認識する契機として、地域づくりにおけるプラスの貢献へと転化させた。これらの地元の熱心な取り組みは、一朝一夕にできたものではなく、長い 300 年にわたる森づくりの歴史と文化から生まれたものだ。

そして、これは成功の物語であると同時に、一度失ってしまった「原生的自然」を人為的に再生させ、それを維持していくことの難しさを物語っていることに、我々はいっそう心を留めなければならない。

近年、高速道路、高校、風車の建設、砂採取などで、再び開発の危機に晒されている海岸林だが、その多大な意義をぜひ読者の方々とともに再確認して、未来に向けて今私たちは何をなすべきかを考える機会となることを願っている。



准教授 呉 尚 浩 (ご なおひろ)

〔略 歴〕横浜生まれ、名古屋に育つ。慶応義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。日本輸出入銀行海外投資研究所で途上国の貧困と発展問題を、東京大学大学院農学生命科学研究科では森林保全を研究。法政大学、国学院大学講師を経て現職。公益学会、環境社会学会、沿岸域学会、ボランティア学会等会員。山形県森林審議会委員、山形海区漁業調整委員等。協働事務局メンバーとして「出羽庄内公益の森づくりを考える会」「美しいやまがたの海プラットフォーム」。公益学や環境学の視点から、国内外をフィールドに「公益社会のデザイン」「多様な主体の共創による自然の循環的利用・保全と地域づくり」を研究。庄内地方では、海岸林保全、飛島の漂着ごみ問題と島づくり、生き物と共生する農と食、いきいきと学ぶ教育を、「大学コンソーシアムやまがた」では山形県小国町の地域づくりをテーマに、研究と実践活動を行っている。

〈主な著書等〉「都市近郊における里山保全の新たな展開と課題ー市民による共同管理をめぐるー」（環境経済・政策学会編『アメニティと歴史・自然遺産』東洋経済新報社）、「市民社会と公益」（小松隆二編『市民社会と公益学』不磨書房）、「飛鳥・心の交流からはじまる島づくりをめざしてー学生と島の五年間からー」（小松隆二・伊藤真知子編『大学地域論ー大学まちづくりの理論と実践』論創社）